

近代真宗（大谷派）の歩みと宗学

— 曾我量深老学匠と茂田井教亨教授の対談記録 —

曾我量深師（前大谷大学々長）は、今年九十五才になられ、清沢満之師とともに近代大谷派の理念を確立した方であり、その偉大な功績は今日の「同朋の会」運動の根本精神にまで及ぶものである。昨年（昭和四十三年）十一月二十七日に師の御自宅をお訪ねした。

清沢・曾我からはじまる近代真宗の精神の系譜は大谷派教団の本質を示している。真宗教団は親鸞からはじまり蓮如を経て形成されたが、政治的な意味だけで大谷派と本願寺派に分離されたものである。信仰信条を同一とする大谷派・本願寺派の存在は、両者が日本の伝統仏教を二分する巨大な勢力をもつからだけではなく——親鸞の宗教を担って、近代と対決した哲学と宗教を獲得したものと、不幸に

してそれをはたしえなかったものとを、社会的存在として今日顕示していることを注視する意味がある。ここに巧まね歴史が生み落した宗教史の社会的実験が進行しているといえよう。

教団にとって、その宗学理念が、いかに本質的な意味をもつものであるのかを、われわれは今そこから学ばねばならない。宗学を軽視し、机上に葬ろうとする教団人の態度こそ、今日放逐せねばならない根本の課題である。

望月欲厚先生亡きあと、形式論理化された宗学、仏教学的文献主義客観主義に墮落した宗学や、正しい歴史認識から離れてイデオロギー的に粉飾された宗学、などを批判しつつ、人間の実存と社会的主体のなかに八日蓮の宗教の

今日的あり方を問うてきた茂田井教亨教授に、真宗近代宗学の創始者ともいふべき會我量深師と対談していただき、近代真宗教学の周辺にある歴史のディテールをひろいだしていただいた。

黒塚にかこまれた小さなしもたやに、ひっそりと住まわれている老学匠の、低く、しかし早口な言葉の間に、御孫さんの声なのか、幼い泣き声が高く響いていたのが印象的であった。そこにはなんの飾りもおごりもない生活があり九十余才の真宗人の面目が躍如としてるように思われたのである。

(丸山記)

【茂田井】 これ(持参した著書を指す)を拝見いたしました。大変お教示を頂いております。ありがとうございます。一度お伺いしたいとは思っておりますので、たまたま私どものところの若い者が斡旋してくれまして、お訪ねすることができましたのでございます。

【會我】 その頃に(持参の著書執筆の頃)自分の宗門では——御開山様といえますけどね、御開山様のことを上人とかなんとか云わないで呼びすてにした——こういってまあだいぶ批難をうけました。(笑)

【茂田井】 親鸞の下に上人を書かなかったわけですね……(笑)

【會我】 今では何もこう敬語使わんのがあたりまえですが、その時分には……みんな上人と呼んでましたから——

【茂田井】 私もこれを拝見しましてね、御宗旨の御開山を敬称をつけないでやっておられるので、ちょっと不思議に思ったんです。……当時……昭和十年頃は……

【會我】 いや不思議でなくてむしろ、他の宗門のお祖師様には敬称をつけて——日蓮聖人・道元禪師——これこれと申しあげる。自分の宗門のお名前を云う時は敬称をつけないと——かわりに宗門の内では祖師上人とか開山上人とか、と云った時には上人というのをつける——

【茂田井】 失礼でございますけれど、先生にいろいろとお尋ねいたしたいと思えます。最初に先生と清沢先生とのご関係というのは——

【會我】 これはですね、私ども特別な関係というのはないんであります。先生の内弟子というのがありました。三人。三人は浩浩洞をつくったり、それからひとつの思想問題や信仰問題とかになると随分と運動した——精神主義というですね。そういうやっぱり深い関係のあるのは内弟子三人おりますね。これはやはりその中学校におるときの先生なんですわ。深い関係の方が三人おります。まだこういう関係の方は外にもおりますでしょう

ね。私など学校の中で教えをうけたわけじゃあございませんです。そういうわけではありますが、宗門では少し年の若い者は全般に清沢先生を敬うていて、一般に広い意味での門弟というふうでございます。だから私どもはそういうなかの一人なんでございます。けれども、お東で先生からの教えをうけまして、それから何といひますか、先生から知遇を得させていたのだと、こういうことでございます。

【茂田井】 曾我先生の宗学的なお考えと、それから清沢先生のご思想とはどういふ——

【曾我】 そうです、清沢先生はです、ね東京のその時分の帝国大学です、ね、帝国大学に入られました。その前に京都の宗門の学校におられました。宗門の「育英教授」といふ——英才教育ということ、宗門で計画してございまして、育英教授という学校をつくりました。そこへ清沢先生は行って、おられました。尾張藩のまあごく下級の士族の長男に生れた。そして窮乏のために僧侶になつたのではなくして、学問したくて僧侶になつた。自分では学問したいけれども、だいぶ貧しい家であり、ますから教育をしてもらうことはできませんで、それで宗門は真宗本願寺のお寺の檀家でありました。東本願寺の（末寺の）住職に自分の志について相談したれば、寺の住職はあなたは知るまいけれども、宗門

にはこういう育英教授という教授があつて、英才教育をしてゐると。——だからしてあなたのような頭の秀れた人は大いに歓迎される。だからまずもつて得度して、坊さんになつて、そしてそこへあがる準備にかかる。そういうすめがありまして、ですね、それではと、喜んでその学校へ入りまして——はじめはまあこういうわけで学問したいから入つたんです。ところがはいつて自分で考えてみますと、自分は非常に不真面目だと。つまりこの宗門を、真宗をいつわつてゐると。いやしくもこの宗門の僧侶となるかぎりは宗門の教えについて、——教えをよく頂いて、そして正しい信仰をもたなければ——そういう態度でなければいかんと。そういうことに眼目を開きまして、それからまあ若い少年時代でありました、ね——少年時代からまじめに信仰を求めるといふ、そういう態度に変わったわけでありました。はじめはただ学問したいというだけでありましたが、それが本當に僧侶になりました。けれども、永い間を得るには、なかなか容易に得られないので、永い間悩まれたこと、ですね。そうですね——信仰を得て生きられたのは僅かでしたね。永い間信仰を求めて得られない。西洋の方の人は信仰に悩んだその道程といひますか、そういうものを記録してありますけれども——キリスト教の方は

よく記録されていますけども、仏教の方はそうじゃあないですね。信仰を得たその……

【茂田井】 結論を書いている——

【曾我】 結論だけを記録しているですね。そういうふうだから聖典を見ましても結論だけがあつて、信仰を得られない。求めた悩みはない……

【茂田井】 悩みはない——確かにそうです。

【曾我】 あまり書いてないですな。

【茂田井】 清沢先生はだいぶ西洋哲学をやっているらしいやいますな。

【曾我】 はあそうですございます。やはり東京帝国大学でございましたからねえ。その時分は唯一の大学ですから——そこに入られましたですから、そして哲学を専攻された。——しかしその時分の日本では哲学というてもですね、ほとんど哲学史くらいしかありません……

【茂田井】 哲学史ですな。

【曾我】 先生はよくヘーゲルの哲学のことをいっておられますけれども、ヘーゲルの哲学も哲学史ぐらいのあれであります。仏教の方はやっぱり天台なんかのことも——まあそれもあんまり専門に研究したというわけじゃあないんじゃないですかね。少年時代には天台教義なんかの、

そんな講釈を聞かれたという程度のもんじゃないかと思えます。三大部なんては読まれたわけじゃあないと思えます。

けれども非常に頭の秀れている人でありますから——めったにない秀れた人でありますから——だから一を聞いて十を悟るといふわけでありませぬ。まあそういうのでありますからして、仏教の方で昔余乗といいますが、余乗の方もまたひと通りの講義を聞いたと。それからまあ真宗でありますから真宗の宗学というものも、ひと通りは聞いておるといふわけでありませぬ。だからものを考える方は哲学でもって考えておりますね。表はそうだけれどもですね、やっぱり仏教の方は表へださんようにして発表しておりますですね。だからあの「宗教哲学骸骨」ってありますですね。あれは東大を卒業されてからして一年間だけ東京でもって勉強したいというので、その時分の第一高等学校の教授っていいですか講師になられました（その時の講義ノートだという意味だと思われる）そういうこともあるし、それから自分の先輩の井上円了先生が哲学館をもっておられた。そこで哲学館の講師で講義しておられました。わずか一ケ年ばかりでしたですね。ところがちやうど京都府が——もと中学が尋常中学高等中学校というのがあ

りましたですが——いわゆる京都府尋常中学校と云っておった。その時分にはもう日本は貧しいもんですからして各府県に中学校なんてものはめったにない。東京とか京都とか大阪とかというところには中学はあったでしょうけれど——京都が京都の面目としてどうしても中学を維持していかなければならんと、こういうのでありますけれど、京都の方の財政ではとても中学を維持する力がない。それでその当時の府知事がご自身で東本願寺へでむいて、中学校をあなたの方の宗門の学校と合併して、そして中学を三・四年の間宗門でひきうけて維持して欲しいと、こう知事が申したものですから、宗門の方でいろいろ相談してお引き受けしようよと、（いうことになりました。）私の宗門はたくさん借金をもってあるのでありますけれども、お引き受けをして宗門の学校をその中に併合しましたですね、三年ばかり経営したわけですね。その時に知事さんがですね、校長はあなたの方の宗門に適当な人がおりまするならば、あなたの方から選んで下さい、こうまあ知事さんがいいましたので、それでさっそく清沢満之さんにごちへ是非来て欲しい——京都へ来て欲しい（ということになったのです。）なんせ宗門のお世話になったし、やはり昔の武士道——武士の血をもっているので迷惑なんてい

わないで——むしろ感激しましてね。そして自分の勉強をする、そういう志をすてて、そして京都へ出て、そして中学校の校長になったと、そういうわけであります。それから二年ぐらい校長をしておって、それから、自分の友達の江川正則（音よみのあて字）という人が——理科の方を出た人で——その方が卒業されるといふと自分が校長をやめて、そして平教授になりました。そして校長を江川正則氏に譲った。その後結核になりましたね——大変無理をしたものですか——どんなにか無理の生活をして——！とうとうそのための病気で亡くなってわずか四十才で亡くなりましたですね。数えて四十一才ですから今でいう四十才ですね。

【茂田井】 お話がまたとぶんでありますけれども、現代社会における教団というものに対して、先生のようなお立場から教学をお説きになるといふむずかしさというものがあろうかと思いますが、そんなことについて先生はどういうふうに考えておられるのかひとつ——

【曾我】 私なんかは、学問らしい学問をしたわけじやありません、まあ自分で少し唯識の方を読みましたものですから、それがまあ頭にあるもんですから——それから清沢先生の文章ですね、そういうものをおそまつでも読んでおりますんで、そういうものをもって、真宗の聖典を—

「講録っていうものがたくさんありますからねえ——昔から——まあ主なる講録を読んでおりますけどねえ。」

まあおそらく清沢先生は宗教ってものではなくて、信仰ひつとつだ、信心ひとつだと、そういうような信念をもっておられました。精神主義っていうものはやはり教わる立場に立っておられるわけでありませう。よく人はその精神主義というものと、唯心論というのとよくこう混乱しております。これは例え唯物論者でもですね、唯物論者でも、実際のことになるとやっぱりこの精神主義というものがある。——唯心論とか、唯物論だとかと混乱すべきものじやあないとしじゆう云っておられたですね。だけでもまあ一般の人では宗教では唯心論であると、こういうふうにも今でもそう云うですね。清沢先生の昔でありますけれども、はっきりこれを区別しておりますね。まあよほど考えておられたんでありますよ、ね、そういうことに関しては——。たとえ学問では唯物論であろうとも、実際の思慮ということになれば、この精神主義であると、こう云っておられましたですね。

清沢先生が重んぜられている人っていうと俳句の方の子規っていう人——

【茂田井】 正岡子規——

【曾我】 正岡子規っていう方もたいへんに重んぜられていたですね。

【茂田井】 私どもは真宗の歴史をよく存じないのでございますけれども、蓮如上人という方は東西ともに重んぜられていてありますが、開祖親鸞上人とこの蓮如上人という、なんといいましょうか、へだたり、あるいはこの——

【曾我】 これはですね、明治維新まではですね、親鸞上人なんっていうのは大体まあその書物はありますから、ある特殊の学者はですねえ、それは教行信証とかひと通り昔からあるわけですね。(一般には知られていなかったことの意味)一番はじめに存覚上人っていう方がありますね。

覚如上人の長男でありまして本願寺の跡を継ぐべき人でありませうけれども、親と意見を異にしておりまして、それで存覚上人は学者肌の人でありまして、親ごさんは多少政治の頭で動いておる、そういうので学問が政治というものであって——純粋な学問が政治でもって(ゆがんでいくのが)息子であるけれども満足しない。そういうことがありましてまあ親子義絶した。存覚という方が最初に教行信証の研究して注釈書を出した。六要抄——それから、もうず

つと徳川時代までこれだけが書物でありますですね。徳川時代へ来まして、お西の方は早くから——百年くらい早くからその学林をつくって研究しておりましたです。なにもかも東本願寺の方は手おくれでございます。

【茂田井】 先生のお話のなかに香月院深励（こうがついん・じんれい）というお方のお名前がよくでるように思いますが——

【曾我】 香月院ですか。同じ年令で同じ時代に円乗院という方がおりましたね——二人はまあ同じ時代におりました……

【茂田井】 江戸時代でございますな。

【曾我】 江戸時代でありますから三百年くらい前に生れた人でしようね。その前に慧空という人がおりますね。慧空・慧然とか慧琳とかといわれております、三人おりますね。大体まあ学問をするのは、蓮如上人以来の学問をするのは大体この大谷家の一門の方が——本願寺の法主が主になって一門の方が学問された。それからこの堂僧ですね。

おつとめをする堂僧——堂僧がこの学問をするようになつた。それから今度一般の末寺の人が学問するようになりまして。一般の末寺の方が学問をするようになりましたがこの香月院という方の時に、一般の末寺の人が学問をする

という時代が来しましたですね。まあ慧空とか慧然とかいうようなものは、やはり特別な門闕でありますですね。香月院ということになると普通の寺院の出身でございますね。香月院のときにはじめて宗学というものが普及しました。そして香月院という方はなかなかねえ、自分で独りで調べるのができないのは、みんな自分の門弟に手分けして調べてそしてみな研究させたものですね。

【茂田井】 この方はお東の方ですか——

【曾我】 はい大谷派の——これは高倉学寮という——今は高倉学寮の建物が残っておりますが、——あれは明治のはじめにできた講堂の方でございますが、高倉会館といつて布教師が布教もする——

【茂田井】 昨晚お話になりました——

【曾我】 はあ、あれが高倉会館であります。

昔は宗学宗学といいましたですがね、この頃では教学——この教学という言葉はですね、これは明治時代から漢文の思想家——孔子とか孟子とか王陽明とか朱子とか、ああいう人たちが教学教学といっておったんです。仏教の方では、そういうような意味での教学という言葉はなかったんで、大体まあ儒教というのは西洋では哲学にあたるわけですね。まあ東洋思想を代表するものは中国では孔子儒教と

いいですね。そういうので、西洋の方は哲学というところ。

東洋の方は教学という。それを仏教の方では——私もよく知らないんですが、教学というのは勸学布教ということをして二つ合せて教学という——

【茂田井】 私もそんなふうに解釈しておりますが——

【曾我】 私どもの宗門だけでなく、あなたの方でもそうでございますね——

【茂田井】 そうです。少しはばを広げまして教学としますが——

【曾我】 教と学と——

教学ということになりますというと「親鸞の教学」でありますね。「親鸞を教学する」でなしに親鸞その人が親鸞の教学をするということになります。法然上人が崇めておる中国の善導大師の教学ということになる。それから曇鸞大師の教学ということになる。そういうのをみな教学教学というようになるですね。

【茂田井】 先生にちよつと妙なことをおたずねするので、先年先生が鈴木大拙先生とお話あいになったことがございますが、それが中外でありましたか何か新聞に連載されまして、そのお話のなかに先生が方便波羅蜜ということ

を強調されていらつしやったんでございますが、あれはどういう意味あいでおつしやったかひとつお聞かせねがたいのであります——

【曾我】 仏教では方便ということを非常に尊ぶですね。

眞実・方便という方便とですね、それからこの普通の方では大慈方便・慈悲方便というですね——大体方便に法についての方便と、それから一つこの仏様の……

【茂田井】 働きの方の方便——

【曾我】 まあお徳の方の方便ですね。般若と方便・智慧と方便という方便がありますね。菩薩の十地のお徳で六波羅蜜の理の方便波羅蜜——方便ですね。方便第七地でございます。七地方便地、八地が願、九地が力と、十地が智、それが方便願力智と、四つを加えて十地という。華嚴の方でそういうふうになんでもが十に——般若なんかは六波羅蜜ですわね。

それよりか般若から方便へであるというそれが非常に困難なこと、菩薩の行というのは、慈悲・智・般若と方便であるということが——そういうことが智度論ですかね、十地菩薩でもそういつておりますですね。それが自ずからひとつの——第七地ですかね。方便——そうなるですね。世親菩薩の十地経論ということになるですね。私も十

地経論なんか読んだことはありませんけれども——往生要集にはやはり引用してあるですね。読もうと思えば読まれることはないですけど、この年になってはもう——

【茂田井】 しかし血色もよくて御壯健ですなあ——鈴木大拙先生とは御同年ぐらいですか。

【會我】 大拙先生は五つ早いです。私は明治八年でありますし、大拙先生は明治三年生れでありますな。鈴木大拙先生と同じようにそれまで生きたいとは思いませんし、生きられるという自信もありませんし、生きて何するといわなくてもありませんから、百まで生きると思っておられませんでしたね——鈴木先生はご自身でも。ご自身でもそういうような意気込みがありました。私の方はそういう意気込みもありませんですしね。(笑)

【茂田井】 大変失礼なお尋ねであります。先生はお寺をお持ちになっていらっしゃるのでしょうか。

【會我】 はあ私は寺に生れたんですけれど、私は次男に生れたもんですからね、よその寺へ養子になっていった。そこに住職の名前をもってたんです。名前だけは。私の養父が生きておりましたんで、私が四十二才の時に寺にいるよりも——事情もありましたし、養父に許可を得て寺から出ると、独立するところという方針にしたんです。これは四

十二才の時、大正五年であります。それから私は東京へ行って東洋大学へ勤めたんです。それから、こんどは大正の終り頃に大谷大学へ出たんです。やっぱり私が排斥されておりましたね、先輩からとにかく、私が異義者であると——まあ一種の異端者ですね。宗門の異端者であるというわけで排斥されておりました。けどまあ真宗大学が大谷大学になって、昇格したんです。昇格したもんでありますからして、今までの宗門の大学とは違ってきたと、こういうので私の先輩の方もこの際會我君たのむ出てもらってはどうかといういろいろ心配されて、私の友達、佐々木月樵という方が学長になられて——その佐々木月樵を学長にしたのは私の先輩の関根念応(音のあて字)という方がおりました、——もうひとつ大先輩であります。念応という方が私の同じ郷里でありまして、佐々木月樵を学長にしたのもえらい反対があったんであります。が、斎藤唯真という方がおりますすねえ、

【茂田井】 華嚴の——

【會我】 ええなんでもひととおりやるんですね。余乘をなんでもひと通りやる。そして大体、村上專精先生からみれば十ばかり歳が若いですね。十ばかり年が若いんだがやはり我が強いもんで、その村上先生と競争しておられまし

た。競争して敗けるもんかと——そういうもんですからね。南条則雄（音のあて字）先生のあとは自分がその学長になるんだと——こう自分で決めておられたんです。まあ順序からいえばそういうことになるんであります——順序は年令やそういうもので。一般の人がみればですね、斎藤という人はずっと若いときから東京におられましたですね、東京に大谷教校というのがありまして、大谷教校の教諭をしておられました。村上先生は校長をしておられました。

その下に教諭でありまして、自分では教頭だと——そういうことを名乗っているんでありますね。なんだって教頭教頭と——そういうふうに思ってたんです。村上先生は『仏教統一論』の大綱編というものを書いて、そして大乘非仏説のことを書いた。それでもって宗門内に問題を起して、そしてなかなか解決がつかんで、結局まあ亡くなられた大谷光演と——

【茂田井】 句仏上人——

【曾我】 その方が仲に入ってますね、村上さんは一応宗門から外へ出してしまおうと、そういうことになったわけですね。そういうような関係があるもんだから、南条先生があとは村上さんはいないし、斎藤さんのむと。（云うだろうと）俺があとをひきうけるんだと自分で決めておる

んですねえ。それまで自分が宗門の順序からいえばそうなるわけですからねえ。だけど南条先生となれば、これはたとえ南条先生がなにも仕事をされなくてもすねえ、まあ南条先生の位が高いもんですからねえ。だものだから人が重んじておるがねえ、斎藤先生となるとだいたいぶ格が落ちるんだ。（笑）

だものだからそのやっぱり消極的人物をひきだしてこんといかんと、そういう説がありまして、その時分に人物を求めらるっていうと清沢先生の大体跡継ぎの一人だと、そしてとにかくその時分の大谷大学、学校に勤めておられて学校の実際のことをみんな教えとったものだから、南条先生が佐々木月樵と、そう考えておった。斎藤さんは名だけなもんですからねえ、ただ看板にすぎないですから。看板学長だよ。だから実力もあり、それだけの徳もあり、力のある人間、そういうものを、そういう人から学長に薦めたいと——なかなかむずかしいんですねえ。やっぱり宗門には頭の古い人がおりまして——（笑）佐々木反対をするもんですから、それで関根って人は——実力者でありますものだからねえ、関根さんから手をまわして佐々木学長を決めたわけです。そういうような関係でその関根さんは、あんな学長になったら、なにぶんにも曾我っていう者をすぐ

教授として引きだして欲しいと条件つけてあった——そういうようなことがあって、私は京都へ出てきたわけです。

——始めて出てきましたが、佐々木月樵さんは早死にしましたしね。金子大栄師は前から勤めておりましたが、ところが金子師の考えが問題になって、私が京都へ出てきて三年目に学校を引き払った。学長——江川先生が学長に就任されたその日、その時私は学校をやめた。この頃ご迷惑をかけた金子問題が起っておるんだが、金子師がやめるというんならば、私もいっしょにやめよう、だからそれだけのことをちゃんと意志を私は申しあげた——結局まあ金子さんがやめられてもどうしてもいてくれというもんだからおりましたけど。しかしまあ問題はあったものだから、それから二年たってからやめましたですね。やめたというより追放されたんですね。金子・私と——そんなことがあって、ずっと十年以上経ってからです、戦争がもう支那事変から大東亜戦に移る前の年にね、金子師と私の二人を学校へ戻るように——そういうことになったんです。

【茂田井】 はあ、そうなんです、ございますか——

【曾我】 せっかく京都へでてきたんだけど、たった五年おつて追放されてしまった。

やっぱそれがいつまでも当代のことが——私ども別に

宗門の妨害したり、宗門をうらんだりいたしませんですがね——

【茂田井】 その時の学生さんに今の訓覇くよ総長さんがおられたんですか——先生が追放された時——

【曾我】 はあそうです。私がはじめて京都へ来ました時訓覇なんか予科の生徒でありました。(笑)

【茂田井】 そうでございますか——

【曾我】 それから訓覇というものと、それから松原というのと、同級生でありますかね。一方の訓覇はおつて、前から宗門の刷新でがんばっておりますが、松原は学問して病氣して体が弱いんです。それでもまあどうにかこうにかしてまあ生きておりますがねえ——人物がいいですけどねえ。人物はいいし、野心はなし、——いい人物でありますけど——

今の宗門の総長なんかは昭和五年に大谷大学の文学部を卒業したんです。

【茂田井】 昭和五年ですか。さようでございますか、それなら私と同じです。

【曾我】 今ではまあ六十幾つかですね。

【茂田井】 いちようど私もその頃の年代です。先生からみれば子供か孫みたいになるんですが——

【曾我】 いやまあ宗門なんて貪しいもんでありましてですね——貪しい宗門でありまして——

【茂田井】 いやあ私も、真宗王国と云っておりますしで、日蓮宗こそ貪しゅうございます。

【曾我】 いや西本願寺はまあわりあいに財産が多くてですね、財政に困らなかつたけれども、大谷派の方は徳川時代に何遍も火災に遇うて、借財があつて、そして明治維新の時もやっぱり仮御堂（音のあて字）でありましたけれど焼かれましたですね。それをあの時分に、あれだけのものを造るといふのは、まあまあ容易ならんことでありましたでしようね。あの時分には百五十万とやら、まあいくらですか——三百万とかというのでありますですけどね——日本中のすみからすみまで材木を探しましてそしてできたものですからね、あの時分にはいい材木を日本中から探したですねですから立派ですなあ。

西本願寺へお参りしてみて比較してみても立派ですね。大きいことも大きいですね。そしてですね西本願寺の方は何か少し大きい法要がありますと炊き出しをします。私の方ではしません。この七百回忌でも炊き出しをしません。大体まあ西本願寺の二倍ぐらいいありますですな、入るとたしか二倍ぐらいい量があるらしいですね。

【茂田井】 建物の前へ立つと圧倒されますですな——

【曾我】 何も樹木もないし、なんだか殺風景でありますですね——あまり感心しませんですけれど——しかしあの柱を見ましても立派ですねえ、本当に立派なものですねえ。それからお内陣のところにある唐金の飾りなんか立派なものですわねえ。西本願寺なんかは比較になりませんですね。木造では大きすぎますね。今の鉄筋コンクリートならば、どんな大きいものでも——今の鶴見の総持寺の祖师堂ですか、鉄筋コンクリートで造ったんでは世界第一の大きさだと誇っておられますが——お参りしてみましたですね——鉄筋コンクリートならばどんな大きなものでも造れますね。木造ではあれで限度でありますなあ。

私はいつでも二十八日に本山の報恩講がありますですから、二十八日の晩を出席しておったんです。二十八日になると一般に皆んな帰ってしまったんです。まあ私の名前を知っておつて、話を聞こうと思つて、残つておりました、そういうのをやりましたです。昨日のようにあんなにたくさんおりませんですわねえ。話をしておりますでも気持ちいいですけど。昨日の二十八日には私居りませんですからねえ私二十八日の朝で、九州へ——

【茂田井】 飛行機で行かれるんですか——

【曾我】 いいえ。汽車なんて別に疲れませんですね。私はもう疲れません。乗物もですし、話をしても疲れません。若い時は話をするときひよろひよるになるんですけどですね。六十代ぐらいまでは——今では話していて疲れませんですね。なんといいいますかかえって話をする——声を出す出し方ですね、そういうものと自分の呼吸っていうものが関係をもっていろいろですね、そこらところを自然に呼吸をのみこんでいる——そういうもんですから何も疲れませんです。

話は一切準備しないんです。一切準備しませんし、それから壇に立って話してしまえば、ものを考えるっていうことはありませんから。——前に準備するっていうこともしませんが。まあただ立って、そして自然に出てくる——自然にでてくる記憶の範囲で話しております。

【茂田井】 しかし先生のお話のなかにはところどころ詩ではございませんけれども、数行素晴らしいお言葉がでるんだございますなあ。やっぱりふっとその時にでるんだございますかねえ。

【曾我】 はあそういうことはなんにも自分で何を話したか、あとへなんにも残りませんですね。記録のなかに何か残るかもしれませんが、話している自分にはなんにも残り

ませんです。——なんにも残らないですね。

私は往生というものは——往生と成仏というものは、阿弥陀仏の本願からいえばタイカよしとひとつですね、タイは一つの問題でしょう。往生即成仏と——けれどもそのジティは——この意義——意義をお分りにならないと違うんだございますねえ。阿弥陀仏はこの成仏をめざして、一切衆生は皆成仏せしめようという、終局の願いをもっておいでになるのだけれども、その目的に達する方法として浄土をたて、そして浄土へ往生するということが（あると）させる——仏さまからいうと来生せしめる——来生ということと往生と二つありますね。阿弥陀如来からは来生——

【茂田井】 こちからは往生——

【曾我】 はい、われわれは往生といひむこうからは来生という——意義からいうと違うわけですね。他力の救いということからいえば往生が主でありますね、往生という方法でありますから。成仏は目的でございます。それで一応は往生は法にある。だからなんにも生きておるときから、信心決定の時から自分は往生という、そのひとつの浄土というものが開けてくる。浄土の生活というものが始まる。それを往生という、生活の名前である。それから浄土というのは、その往生の終局の目的でありますね。そういうもので

ある。だから成仏は未来である、往生は現在である。どうも、往生を未来へもっていくということがありますですね——

【茂田井】——常識はそうなっていますねえ——

【曾我】 それはつまり浄土教はもと萬宗時代くわんしゅうっていうのがありますですねえ。その萬宗時代の聖典が觀無量壽經であります。浄土經(が) 本當に獨立してくるというと、大無量壽經にもどってくる。萬宗時代は勸經が根本聖典であります。勸經は未來往生でありますから、大無量壽經までが未來往生というふうになって混乱しているから、それをはっきりさせなければならんと、それが私のまあひとつ主張であります。

今でも宗門の人々は往生即成仏といって往生まで未來へもっていつていますですね。それを私はいかんとおもいますですね。そういうところは例えば、親鸞上人の教行信証なんかでもですね、そのところになんかはっきりしないものがあると思うんでいます。まあ蓮如上人なんかはもちろんのことありますが、これを、往生と成仏というものを、はっきりと区別するということは、本當の阿彌陀佛の本願の意義であるし、また親鸞の教行の本當の意であると思うんです。こう私は確信しておるんであります。

【茂田井】 どうも私どもは先生の書物を拝見いたしましたし、御開山上人より曾我先生の方が更に——そういうことは宗門的には云えないかもしれませんが、私ども外部のものからは御開山上人よりも曾我先生の方が進んだお考えであると——

【曾我】 いやそのねえ、世親菩薩の浄土論というものがありますね、浄土論を読むというと、五念門・五功德門とというのがありますね。五念門というのは、念仏が主になって、そして自ずから念仏修業するときにそれが自ずから身口意の三業に広がり、慈悲弥陀の二つに広がっていくと。そういうようにしてこの三業二意の五念門といいますが、二意は慈悲・弥陀の、三業というのは身口意の三業で——念仏は口業でありますけどね——口に南無阿彌陀と称えるので——それで念仏という言葉は第十八願のなかにあるのでありますね。乃至十念という——念というのは念仏、くわしくいえば十遍念仏というそういう意味でありますから——念仏という言葉は第十八番にある。ところがその前の第十七番に称名、称号ということがありますですね。法然上人は十八番のところになっておられるから念仏・念仏とおっしゃるけれど、親鸞上人はつまり、十七番に特に立場をおいて、称名とか、名号とかということをおっしゃる。

念仏ということもある程度（おっしやるけど）——つまり蓮如上人は念仏・念仏といって法然上人と同じでありますけども、祖師上人の方は名号として、法然上人が念仏というておられるところを、みな念仏とは云わないで名号・名号といっておられる。

阿弥陀仏の選択本願というものではないですからこれは異時である。これが本當の仏様の御本意ではない。因は異時でありましてとにかく成仏なんていつになるかわからないものですから、とにかく往生を未来におく。もうひとつ二十の願というのがあってございます。三願というものはひとつになつておるんでございます。そういうことをちやんと親鸞上人は明らかにしておるんであります。そういうことが明らかにしておるのに、親鸞以前にはそういうことは、どうして注目されないのであるかということ、以前は大体萬宗でありますからねえ。萬宗というのがありまして、方々は萬宗に甘んじておられませんがねえ、特に曇鸞大師であるとか普導大師であるとかは萬宗とかに甘んじておられませんが、一般的に萬宗の待遇に甘んじておりましたですね。法然上人の時にきてはじめて萬宗なんて問題ではないということを主張して、そして浄土宗専誦念仏ということを主張したというそういうわけ

あります。弥陀の本願だけではなしに、仏教全体についてのひとつの真実と方便というものを転換してきた。それが法然上人、そういうことになってきたですね。真宗教学といいますが、教学史といいますが、歴史がそうやってきたですねえ。

法華経なんていうのは経典は昔から尊敬している、仰いでいる経典でありますねえ。中国から、印度からはまっているですねえ。

私も若い時にあの日蓮聖人遺文録といいますがねえ——遺文録というものが明治時代に一冊になって出版されました。それを買ってだいたい読みましたですねえ。

【茂田井】 先生からご覧になった日蓮というものはどんなふうにお考えでしょうか。

【曾我】 大変に心にひかれますねえ。だんだんに年がいきますとまあ気持が変ってきますが、若い時にはやはり日蓮聖人の遺文を拝読しますとねえ、なにかやつぱりこころが湧くといえますか——あの時分に高山樗牛という方がおりましたねえ。高山樗牛、姉崎正治、それから山川智庵さん——雑誌がありましたね——あれなんていいましたかね——

【茂田井】 国柱会から出したものですか。

【曾我】 国柱会のです。

【茂田井】 最初だしました総合雑誌みたいな「毒鼓」ってというのがありました。

【曾我】 大きな雑誌ではありませんが、毎月出ていて読んでおりましたです。それから日蓮聖人の遺文録ですね。

いわば親鸞さんとは違いますがねえ、日蓮聖人に照らして親鸞上人をみるですねえ。それから日蓮聖人をみようとするときは親鸞上人に照らしてみるですねえ。両相照してみすると、両方が相通するものがありますね。

【茂田井】 私もそうであります——ただちよっとちがうところは昨晚も先生おっしゃいましたが、横超と横出でございませうか、そこらところで聖道門的ところが日蓮にはございませうからねえ——

【曾我】 法華経というものは教行信証に引用しておりますねえ。

【茂田井】 はいありませんですね。華嚴は引用されていきますが——

【曾我】 ないけれどもですね、やはり天台宗に長い間おったですからね。二十九才のときはじめて法然上人の門下になったんですからね——

なかなかねえ、外の人はもうさっさと法然上人の教えを

受けたでしょうけれども、親鸞上人はどこまでも、最後までこの——つまり最後は観音様に祈願して、観音様のお告げというものをこうむっていたですね。

【茂田井】 直接「同朋の会」の運動にご関係がなくともですね、先生が大学を追われなすったときに、全国を巡錫なされたと、それが「同朋の会」の運動のひとつの下地になっていたのではないかと、まあ観察でありますがあたっておりますでしょうか。

【曾我】 まあそんなことは知りませんですね。(笑)

知りませんがねえ、しかしまあ清沢先生というものに関して、今の人はあまり知らんですからねえ。ですから清沢先生との関係ということになりますれば、私もずっと昔から直接に先生の教えを受けたわけですから——まあそういう方はもうおりません。やはりまあ大谷派の方では清沢先生ですからねえ。それはまあ書いたものには真宗宗学とか真宗宗学とか、そういうものはあまり色は表には出しておられませんが、その思想の根底になるものはやはり親鸞上人の教えで、歎異抄というものを大変に尊重せられておるですね。

【茂田井】 私も清沢満之先生の全集を求めまして、ちよ

つと読んでみたんですけれども、曾我先生のものを拝見するようになわけにいかないのです、ちがうなあと思ったんですが、表にはでておらんですね。

【曾我】 全集ですから、まあ若い時に書いたものも入っておりますから——まあ真宗内部で「無尽灯」という機関誌をつくったのは明治時代ですね。

【茂田井】 先生のご出身は新潟でございますか。

【曾我】 はい。

【茂田井】 お言葉に新潟なまりがあるから——

先生へ願^がをへぐわん^とと発音されますですね。私の父が新潟でございましてですね、火事をくわじ、菓子をくわじと発音しましたんで、先生にそれがありますんで新潟かと——

【曾我】 かとくわとをはっきり区別しますですな。

あまり区別の仕方が強いものですから——強すぎるんです。(笑)

【茂田井】 今はかなが随分ルーズになりましたですね。

【曾我】 私は強く区別しすぎましてな——

【茂田井】 昨晚のお話のなかに、山田宗陸氏が「人間親鸞」というテーマでございまして、人間親鸞に対して先生は特に日本人親鸞というものをお話になりましたが——

【曾我】 それはですね、人間は血というものがありませんね、それは自覚にありますですな。

【茂田井】 先生は言葉の表現のうえから特に日本的といったものを強調されたんじゃないやあございせんか。「しからしむる」といったような——

【曾我】 日本の伝統にはそういう「しからしむる」とか「しからしめられる」とかといったこういう言葉の使い方があるでありますね。なんでそういうことをいうのかといえ、やっぱり人間は自分で単独で生きる世界と、それからお互いにもちつもたれつで生きるみちがある。仏教の縁起というのはそういうものである——どうしてそういう関係があるかと根源を求めてそうして——如来の本願という強い立場があると、曇鸞大師の「往生論註」を読むところのところが書かれている。曇鸞大師の到着点というものを親鸞上人は出発点とした。

【茂田井】 先生の「しからしむる」で私が昨晚拝聴しながら思いだしたことは、章安大師が天台をほめた言葉に「天竺の大論なおその類にあらず、いわんや震旦の法師おや。これ誇にあらず、これ法相のしからしむるのみ」と法相のしかるのみと書いてあるんでございませうけれども、あれを特に「法相のしからしむるのみ」と読ませております

んで、そういうところに先生のお話の心があるなと思ひまして、実は拝聴しておりましたんで。

【曾我】 禅の鈴木先生がですね、めい自然というものはどうして本當のめい自然というものが成立するかというところが願力にしようたくしてめい自然に到着する。願力自然というものがあつて悟りというものが成立し、迷いの要領自然というものが成立する。(といっている)唯自然ということとはどこの宗派でも云うでしょう。願力自然というのは親鸞上人がはじめてです。業道自然というところ——宿業という

——宿業によって——それだけであれば運命論になってしまう。運命論になってしまう。業というものは本願というのを前提としなければ成りたんです。明自然の悟りも迷いも如来の本願というのが前提して始めてこの迷いというものもなりたつ。迷いというものが全くどうすることもできないものならばですね、迷いではありませんね。迷いというものは迷いから脱却していくことを前提して、はじめて迷いというものは成立するのであります。迷いはどうして成立するか、悟りはどうして成立するかというところ、如来の自から然らしむる如来の大悲本願というものを前提して迷いも成りたつ、悟りも成立する。迷いを超えて悟りの境地に到達する。それを

親鸞上人が明らかにしたんです。法然上人の業というものは——法然の法は法爾の法でありますねえ、それから然は自然の然ですわねえ。自然法爾をひっくりかえして法爾自然といいますか、法爾自然を法という字と然という二つの字におさめて法然ということになります。正しくは法爾自然という四字になりますが、二字に収めて法然と名のつたんです。だから法然上人は、火は上に昇るし水は下へ流れていくと、地は生活の流れで念仏していくというとりまね。……

とにかく法然上人の弟子方は教えを暗中摸索して、結局最後まで暗中摸索で終ってしまった。それで、親鸞上人のみが法然の撰撰本願と、第十八願念仏往生の願を撰撰本願と決めた。どうして何を前提としてそういうことは決定されるものかと(いうことは)わかりませんがねえ。それを親鸞上人は明らかにした。十七願というものをたてたわけですね。それが今浄土宗の人はそれがわからんですね。浄土宗がわからんっていうのは真宗学がわからんからですよ。真宗学がはっきりすれば、浄土宗の人はそれを読めばわかるけれど——

【茂田井】 お尋ねいたしますが、お西の古典的な宗学を

先生のお立場からどんなふうにご覧になっていらっしゃるんですか。

【曾我】 まあ——お西の老学匠と、それから若い学者と違うんじゃないですか。それから学生とまた教授と意見が違うんであります。

【茂田井】 清沢先生のおられない場合の真宗教学というものはだいぶ違ってくるんじゃないでしょうかね。

【曾我】 それはまあそうですね。こちらの方はなんととっても清沢先生を尊敬しておりますですからねえ。清沢先生をまあ悪魔のように思っておる人も宗門のなかにはあるんですよ。あるんでありますけれど、年の若い者はみんな、先生の方向をむいていることははっきりしていますからね。お西にはそういう人はおらんですわね。

【茂田井】 私ども門外の者にはわかりませんが、例えば本典の教行信証などの解釈に、お西とお東で解釈の違うというようなことはありますか。

【曾我】 それはまあ大谷派の方では、香月院という方がおりまして、香月院という方は、自分で派をたてるというようなそういうことはない、自分は専らお聖教の教えを受けるといふ、こういうのが香月院の学問でありますね。自分のもっている識見で、そういうものでお聖教を解

釈していくというのではなしに、自分を無になつて、心を無にしてお聖教の教えを受けると、そういう立場ですね。

お西の方は学派というものがあつてですね、何とか派・何とか派というのがあつて自分の派つていうものがある、そういう派をたててお聖教を決めていくと、こういうようなことをお西の人はしますね。そういうことをしないと、こういうのが香月院ですね。どうしてそういうことができるか、というと、ここのはいろいろと問題がありますね。まあ学説がちがうようですね。むこうの方はいかにも、自分の識見というものを主にするという傾向がありますですね。

【茂田井】 私ども門外の者には先生や金子先生の方がわかりがよろしいのですが。

【曾我】 この頃では何も書きませんので、何か話をしますとこのテープにとります。金子さんはやかましい人ではない、自分で中を訂正されましてね、金子さんが話をされますとある人が速記者をつけておきましてね。金子さんの話はみんな速記します。それをまた速記をもとにしてまた話します。それをなんべんでも話をして、三べんも四べんも話をして訂正して、そしてそれをまとめて書物にしますね。

今私も「宗報」というのに和齋の講釈をしています。あ
あいうものも金子さんは出版することをはじめから予定し
てやっていますねえ。私なんか出版するなんてそんなこと
ははじめから頭にありませんからねえ。私は話をするこ
が主眼であります。

昔佐々木月樵師が、金子さんと私の文章を批評しまして
ね、曾我君の文章はまあちょうど山から木を切り出したみ
たいなもので、枝も切つてないし、皮もむいてないし——
ただ木を切つたままのものでこれは木材にならんと、これ
を材木にするのには枝も切らにやあならんし皮もむかにや
あならんと、そういうことをしておらんと——金子さんの
文章は月夜の光景を映すと。金子さんはお月さまを書いて
いると、お月様なんて書かなくてもかまやへんと、その全
体が月夜の光景だと、木もあれば、山もあれば、花もあれ
ば、いろいろあると。その全体が月夜というものをみんな
象徴しているものと、お月さまなんて書いても書かんで
もいいものだと。ところがお月さまだけ書いてると——
(笑) お月さまだけ書いてると、全体夜だということしか
わからんと(笑) そう佐々木月樵師が金子師の文章を批評
したと、そういうことを聞いたりしますねえ。曾我君なんか
もっと考えなおして、そして一応材木になるようにそ

うところまで整えてですね。文章にするようにと——それ
を山から切りだしたままのを書いてる——

そういえばその通りです。(笑)

【茂田井】 その生地のままが私どもにはやはりいいです
なあ——

【曾我】 しかし昔私が書いたものをそう評してるんです
からなあ——論集の「救済と自証」ああいうものを佐々木
師は批評してるんですから——

【茂田井】 私これを拝見しましてから、「救済と自証」
「内観の法蔵」「連証と己証」といったものを拝見したん
であります。

【曾我】 もう全部絶版でありますな。もう絶版でかま
いせんわね。

【茂田井】 あれはちょうど戦争中でしたので非常に悪い
紙でしたので、もう少しい紙で出していただければ——
あのざら紙でしたのがおしいのですが——

【曾我】 一番始めの「救済と自証」は西村九郎右衛門と
いう人——昔からの木版の出版屋で——それを丁字屋とい
うのが買ったんですな——私はその西村というのから出し
たんです。それは九州の人が資金を出して、そして西村に
出版させたんです。初の計画は、第一巻が売れるという

第二巻を出していくと、そういう計画だったのが、倒れてしまった。それで第二巻は中外日報で——中外日報で出版しておりましてね。まあどうにかこうにか元金が回収できるとみこみをつけて出版したんですね。それを丁字屋が買いとったんですね。始めは全く九州の人が費用を出したのとはなくなつてしまひましてね——

【茂田井】 先生の宗学は、はじめから田辺元博士あたりも注目しておりますことは、田辺さんのものにてでおりますなあ——

【曾我】 はあ田辺さんは私の書物を全部買って読まれたようですな——

懺悔道としての哲学とか——私どもはさんげ道といひますけれどあの人たちはさんげ道といひますなあ——（笑）意味はわからんでさんげ道といひますのですけれど、本当はさんという字は梵語の音うつしですなえ、けというのとはあれは中国の言葉ですなえ。「さん」と「け」というものを組みあわせたんですなえ。仏教の方で「さんげ」と読んでおるのを一般の人は「さんげ」といひますなあ——「さんげ録」とか——私も「さんげ録」といひております。——「け」いう字だけに意味がありますな。恥じるといふ字ならば恥じて悔いるというのであれば「さんげ」で

すがね。字は別ですね。そういう意味だと思つてゐるんでしよう、あの人はい——

【茂田井】 昨日の先生の「因」と「縁」と同じですな——
【曾我】 京都で大きな観音さまを造つたですなあ。それをですな、一般の人は「れいざん観音」といひております。あれは「りようぜん観音」ですな——法華経の靈山会上の——（笑）

曾我先生と茂田井先生の対談は、果てしもなく続くようであつた。曾我先生は、曹洞宗の最近亡くなられた管長や真宗教団の伝統などにも触れられていつた。九十四才（昨年）とは思えぬ壮健さに私たちは驚くばかりであつたが、明日は九州の東西両派の人々に招かれて講演旅行へ立たれるとのことであつたので、辞して退出した。質素な室の壁には「願に生き、信に死す」といふ先生自筆の色紙が一枚かかつていた。

（録音から文字に移す段階で、熟語や名詞のわからない部分がたくさんできてしまひ、音をそのまま記しておくということになつてしまつた。誠に無学を恥じざるを得ない。文責は私にあることを附記して御詫び申しあげます。丸山記）